

【古典文法 格助詞「の」識別①】

問、次の文中にある傍線部の助詞の意味を答えなさい。

- ① 上・中・下、酔ひ飽きて、いとあやしく、潮海うしほのほとりにて、あざれあへり。(土佐日記)
- ② 帥殿すしだんの、南の院にて、人々集めて弓あそびしに、この殿渡らせ給へれば、(大鏡)
- ③ 立てる人どもは、装束しょうそくのきよらなること、ものにも似ず。飛ぶ車一つ具したり。(源氏物語)
- ④ 平らなる板いたの一尺ばかりなるが広さ一寸ばかりなるを鼻の下に指入れて、(今昔物語集)
- ⑤ 「さらにまだ見ぬ骨のさまなり。」となむ人々申す。まことにかばかりのは見えざりつ。(枕草子)
- ⑥ 父の大納言は亡くなりて、母北の方なむ、いにしへの人の、由あるにて、親うち具し、(源氏物語)
- ⑦ 瓜にかきたるちこの顔。すずめの子の、ねず鳴きするに踊り来る。(枕草子)
- ⑧ いかに思ひ始めけることにか、世の中に物語といふものもののあなるを、(更級日記)
- ⑨ 大弐の居所は遥かなれども、楼の上の瓦などの、心にもあらず御覧じやられけるに、(大鏡)
- ⑩ 白き鳥の嘴と脚と赤き、鳴の大ききなる、水の上に遊びつつ、魚を食ふ。(伊勢物語)
- ⑪ 深田ありとも知らずして、馬をぎつと打ち入れたれば、馬の頭も見えざりけり。(平家物語)
- ⑫ 飛び急ぐさへあはれなり。まいて雁などの連ねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。(枕草子)
- ⑬ 御契りや深かりけむ、世になく清らなる玉の男皇子さへ生まれ給ひぬ。(源氏物語)
- ⑭ 川を率て行きければ、草の上に置きたりける露を、「かれは何ぞ。」となむ男に問ひける。(伊勢物語)
- ⑮ 昼は日暮らし、夜は目のさめたる限り、灯を近くともして、(更級日記)

⑪	⑥	①
⑫	⑦	②
⑬	⑧	③
⑭	⑨	④
⑮	⑩	⑤

【古典文法 格助詞「の」識別①】解答

問、次の文中にある傍線部の助詞の意味を答えなさい。

- ① 上・中・下、酔ひ飽きて、いとあやしく、潮海うしほのほとりにて、あざれあへり。(土佐日記)
- ② 帥殿すしだんの、南の院にて、人々集めて弓あそびしに、この殿渡らせ給へれば、(大鏡)
- ③ 立てる人どもは、装束しょうそくのきよらなること、ものにも似ず。飛ぶ車一つ具したり。(源氏物語)
- ④ 平らなる板いたの一尺ばかりなるが広さ一寸ばかりなるを鼻の下に指入れて、(今昔物語集)
- ⑤ 「さらにまだ見ぬ骨のさまなり。」となむ人々申す。まことにかばかりのは見えざりつ。(枕草子)
- ⑥ 父の大納言は亡くなりて、母北の方なむ、いにしへの人の、由あるにて、親うち具し、(源氏物語)
- ⑦ 瓜にかきたるちこの顔。すずめの子の、ねず鳴きするに踊り来る。(枕草子)
- ⑧ いかに思ひ始めけることにか、世の中に物語といふものもののあなるを、(更級日記)
- ⑨ 大弐の居所は遥かなれども、楼の上の瓦などの、心にもあらず御覧じやられけるに、(大鏡)
- ⑩ 白き鳥の嘴と脚と赤き、鳴の大ききなる、水の上に遊びつつ、魚を食ふ。(伊勢物語)
- ⑪ 深田ありとも知らずして、馬をぎつと打ち入れたれば、馬の頭も見えざりけり。(平家物語)
- ⑫ 飛び急ぐさへあはれなり。まいて雁などの連ねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。(枕草子)
- ⑬ 御契りや深かりけむ、世になく清らなる玉の男皇子さへ生まれ給ひぬ。(源氏物語)
- ⑭ 川を率て行ければ、草の上に置きたりける露を、「かれは何ぞ。」となむ男に問ひける。(伊勢物語)
- ⑮ 昼は日暮らし、夜は目のさめたる限り、灯を近くともして、(更級日記)

① 連体格	② 主格	③ 主格	④ 同格	⑤ 代用
⑥ 同格	⑦ 連体格	⑧ 主格	⑨ 主格	⑩ 同格
⑪ 連体格	⑫ 同格	⑬ 連用格	⑭ 連体格	⑮ 主格